

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 池 玫京

池玫京（ジ・ミンギョン）氏の博士論文「接続表現の多義性に関する日韓対照研究：neunde と kedo を中心に」の審査結果について報告する。

本論文は、多様な用法を持つ韓国語の接続語尾 neunde と日本語の接続助詞 kedo を中心に、両言語の接続表現をいくつか取り上げ、それらの用法分布と機能について考察したものである。従来の研究では neunde と kedo に関する用法分類が行われているものの、分類の基準が明確に示されておらず、また分類した用法間の関係が不明確であった。本論文では、neunde の分析を通して一般性のある複文の分類基準を提示し、その基準の妥当性について日本語 kedo や類似表現を対象に検証を行っている。さらに、分類基準に基づき各表現の用例の分布範囲を示すことによって、各表現の全体像を明確にし、複文全体の中での位置づけを行おうとする。

本論文は、序論、結論を含め 9 つの章からなり、序論、第 1 章では、先行研究の成果とその問題点を指摘した上で、本論文の目的を述べている。第 2 章では分析対象の中心となる neunde と kedo の形態的特徴をまとめたのち、用例の分析方法について述べている。特に、分析に際しては、前件と後件の意味関係に注目すること、分類の基準を設けること、出来るだけ偏りのないデータを対象とすることを重要視している。

第 3 章では、neunde の用例分析を通して 4 つの分類基準が neunde の使用に関わっていることを示し、各基準に該当するか否かによって、用例が 5 つのグループに分かれることを明らかにした。第一の分類基準は「前提の有無」で前件と後件の事態関係において前提が存在するか否か、第二の基準は「前提との一致」で後件に前提と一致する事態が述べられているか否か、第三の基準は「対立」で前後件の意味内容において対立があるか否か、第四の基準は「前件命題の希薄化」で前件の命題内容が希薄化しているか否かである。これらの基準は階層性を持っており、まず前提の有無で用例は 2 つに分かれ、前提と一致する場合をケース 1、前提と不一致な場合をケース 2 とする。さらに、前提なしの場合は対立ありの場合をケース 3、対立なしで前件命題の希薄化ありの場合をケース 4、前件命題の希薄化なしの場合をケース 5 とした。

第 4 章では、上記の分類基準で分けられた neunde の各ケースについて、それぞれのケースが持つ特徴を明らかにしている。ケース 1 は、後件が未実現の事態で、文末に当為のモダリティや話し手の意志、聞き手への確認要求や命令・勧誘など、働きかけの表現が使われていること、ケース 2 は前提に一致しない事態への驚きや不満、非難や反語の意味が示される場合があること、ケース 3 は肯定と否定、対義語の羅列、変数の制限、および取り立て助詞の使用によって対比の意味合いを帯びること、ケース 4 は前件が発話行為のリスクが高い後件に付けた注釈の役割を持つことから、発話行為領域における機能に不一致があること、ケース 5 は意味構造に特徴があり、前件で説明の対象を提示した上で、後件で説明を施す関係が見られること、などを指摘している。以上のように、4 つの分類基準を使うことにより、全ての用例を統一的に分析し、分類された各ケースの相互関係も明確に示すことが可能になった。

第 5 章では、neunde の分類基準を用いて、対応表現とされる日本語 kedo の用例を分析し、分類基準の妥当性を検証している。分析の結果、kedo はケース 2 から 5 まで存在し、接続可能な範囲が neunde と一致しないことが明らかになった。さらに、ケース 2 では前提との不一致による意外感や不満が現れやすいこと、ケース 3 ではノダとの共起が起こりにくいこと、ケース 4 ではノダとの共起が聞き手の認識状況と関連していること、さらに、ケース 5 の平叙文の場合、意味的に対立しない前後関係を kedo で結びつけるためにはノダとの共起が必要であると指摘した。一方、韓国語 neunde においてはノダ相当形式である geosida との共起は不可能であり、日韓で違いが見られることも指摘している。以上の分析から、neunde と kedo の異同が明らかになると

もに、本論文で示した分類基準が *kedo* の分類にも有効であることが分かった。

第6章では *neunde* と *kedo* の類似表現である韓国語 *jiman*、日本語 *ga*、*noni* を取り上げ、分類基準の最終検証を行っている。これらの表現の用例分析を行った結果、まず韓国語 *jiman* の用例はケース2から4までで、*neunde* より接続する範囲が狭く、書きことばや格式ばった場面で使われる傾向があることがわかった。次に、日本語 *ga* の用例は *kedo* と同じくケース2から5までの範囲で見られたが、ケース5の平叙文の場合、*kedo* ではノダとの共起が必要なのに対し、*ga* ではノダとの共起があまり見られないという違いがあった。さらに、*noni* の用例はケース2と3で見られ、何らかの不一致がある前後件関係を結ぶことがわかった。以上から、四項目の分類基準が *neunde*、*kedo* 以外の接続表現の分析にも有効であることが確認された。

第7章では、本論文で取り上げた日韓の接続表現の使われ方を、事態の流れという観点から考察している。前後件の関係が前提と一致した展開になっているときは「+」の流れ、前提と一致しないあるいは相反する関係にあるときは「-」の流れ、明確な事態の流れが見られないときは「0」の流れとみなすと、*neunde* は「-~0~+」、*ga* は「-~0」、*jiman* と *noni* は「-」の領域を接続することになる。また、*kedo* は「-」の領域を基本とするが、ノダが共起すれば「0」の事態関係も結ぶことができると指摘している。そして、このような接続領域の違いは、個々の表現が持つ機能の抽象度と関係しており、*neunde* のように多義的な表現は表現自体の持つ機能の抽象度が高いためだと主張する。最後に結論では、これまでの考察をまとめ、本研究の意義と今後の展望と課題を述べている。

本論文の特徴は、大きく3点あると考える。第一に、様々な用法を持つ接続表現を分析するにおいて、客観性の高い分類基準を提示したことである。この分類基準を提示したことにより、用例の統一的な整理が可能になり、用法相互間の関係も明示的にすることができた。第二に、同じ分類基準で韓国語と日本語の接続表現を分析し、それぞれの表現の特徴を明らかにしたことによって、この分類基準の有効性を確認し、さらに他の接続表現にも適用可能であることを示唆した点である。本論文の提示した分類基準は、両言語の複文研究を進める上で、大いに役立ちうるものと言えよう。第三に、本論文の分析作業の結果から、従来不明確であった韓国語、日本語の接続表現の特徴が明確になり、対応する日韓両語の接続表現の類似点、相違点も明確にできたことである。その成果は、韓国語教育、日本語教育で応用可能なものであり、教育分野への貢献も大きい。以上のように、本論文が日韓両語の接続表現に関してしっかりとした分析を行い、両言語の接続表現の用法とその相互関係を明らかにしたことは、韓国語学、日本語学での貢献はもちろん、韓国語教育、日本語教育においても大きな影響を与えることとなる。

審査においては、分類基準設定において重要な概念である「前提」のとらえ方が論文の中で一定していないなど、「前提」の定義についての論述が不足しており、さらなる考察が必要であること、第7章で述べている「事態の流れ」については、言語学的な定義が不十分であり、より精緻な議論が必要であること、*kedo* とノダの有無について興味深い指摘がなされているが、その背景についてはもう少し説明が必要であること、など、今後検討すべき課題がいくつか指摘された。さらに、接続表現が多義性を持つのではなく、解釈の多様性と見るべきであること、韓国語 *jiman* について、対象とすべき形式が漏れていること、出現頻度の分布について、その意味するところを考える必要があること、外国語教育に適用する方法について何らかの記述がほしいこと、などの指摘もなされたが、それらが本論文の価値を損ねるほどのものではないことが確認された。

したがって、本審査委員会は本論文を博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。